

歴史演義小説の図像の淵源

历史演义小说图像的渊源

大塚 秀高*

まえがき

埼玉大学に蔵される『会纂宋岳鄂武穆王精忠録』（以下では『精忠録』と略称する）は筆者が韓国のソウルで購入したものである。まずこの『精忠録』について簡単な紹介をしておきたい。

朝鮮刊本、大型、六巻四冊（第三冊を欠く）。第一冊の巻首に、すべて木版写刻による「精忠録肅廟御製序（1709年己丑撰稿、1969年己丑具允明奉教書）」（每半葉五行毎行十字）、「当寧御製後序（1769年李瀾奉教謹書）」（每半葉五行毎行十字）、「御製永柔県臥龍祠致祭文（朴志源奉教謹書）」（每半葉五行毎行十二字）、戊申銅活字により排印され每半葉十行毎行十八字からなる陳銓弘治十四年と李山海万暦十三年の「精忠録序」、木版の「会纂宋岳鄂武穆王精忠録目録」、「武穆像」一葉、「精忠録図」三十五葉（岳飛の肖像半葉一図と見開きで上図下文の戦功列図三十四図）を置く。第二冊以後は本文であるが、これも戊申銅活字によって排印されており、四周双辺、有界で、每半葉十行毎行十八字からなる。第二冊は巻一の宋史本伝、巻二の武穆事实、武穆御軍六術、武穆諸子、第三冊は巻三の武穆著述、巻四の古今褒典、古今論述、第四冊は巻五の古今

賦詠、古詩、絶句、歌行、巻六の律詩ならびに弘治十四年趙寛後序と万暦十三年柳成龍奉教謹跋からなる。

一 李氏朝鮮における『精忠録』刊行の経緯

「当寧御製後序」に記される「皇朝崇禎戊辰（1628）紀元後三己丑」から、李氏朝鮮が宗主国とする清の乾隆己丑三十四年（1769）にこの書が刊行されたことがわかる。またその明朝を「皇朝」とよぶ措辞から、李氏朝鮮が明朝を滅ぼした清朝の統治に全面的に心服していたわけではなかったこともわかる。『精忠録』は中国北部に建国された征服王朝の女真族の金朝と戦った宋朝の民族英雄岳飛に関わる資料を集めた書であったから、その書の刊行そのものが、もと後金と称していた清朝への対抗の意味をもっていたのである。

『精忠録』が李氏朝鮮で刊行された経緯については、巻頭に置かれる「精忠録肅廟御製序」及び「当寧御製後序」の二序（ならびに「御製永柔県臥龍祠致祭文」）により明らかである。

『精忠録』は李氏朝鮮において二度刊行されている¹。最初は明の弘治十四年（1501）に太監麦某が増補刊行した木版本（陳銓の序ならびに趙寛の後序はこの時に書かれた）を底本としたもので、李氏朝鮮第十四代宣祖李昞（在位1567-1608）により、明の万暦乙酉十三年（1585）に銅活字（癸酉字）で刊行された（李山海の序

* おおつか・ひでたか
埼玉大学教養学部教授 中国俗文学

ならびに柳成龍の跋はこの時に書かれた)。これが後述する尊経閣文庫蔵本と宮城県図書館蔵本で、精緻な図像が附されている。二度目はこの癸酉字本を底本としたもので、李氏朝鮮第二十一代英祖李吟（在位 1724-1776）により、乾隆己丑三十四年（1769）に再度銅活字（戊申字）で刊行された。その巻頭を飾る「精忠録図」は、自身が十五歳のおりに「士夫家」で見出した癸酉字本にもとづき、康熙己丑四十八年（1709）にあたる翌年に父肅宗によって作成され宮中の宝文閣に蔵されていた写本によって、新たに刻されたものであった。これが後述する東京大学総合図書館阿川文庫本²、お茶の水図書館成篁堂文庫本ならびに埼玉大学蔵本である。ちなみに「精忠録肅廟御製序」を撰稿した肅廟は李氏朝鮮第十九代肅宗李焯（在位 1675-1720）であり、「当寧御製後序」を撰稿した当寧はその第二子第二十一代英祖李吟であった。

既述のごとく、『精忠録』の尊経閣文庫蔵本（加賀前田藩旧蔵）と宮城県図書館蔵本（仙台伊達藩旧蔵残本）は万暦乙酉十三年出版の癸酉字本である³。したがって、この両書には豊臣秀吉が李氏朝鮮を侵略したいわゆる朝鮮征伐のおり、これに参加した諸大名によって持ち帰られたものである可能性がある。東京大学総合図書館阿川文庫本、お茶の水図書館成篁堂文庫本（徳富蘇峰旧蔵）ならびに埼玉大学蔵本は、いずれも近代以後に朝鮮半島で購入された乾隆己丑三十四年刊行の戊申字本である。ただし『お茶の水図書館蔵新修成篁堂文庫善本書目』はその刊年を誤り、嘉慶十三年としている⁴。

二 中国における『精忠録』刊行の経緯及びその『新刊大宋演義中興英烈伝』との関係

既述のごとく、癸酉字本は明の弘治十四年（1501）に太監麦某により増補刊行された木版本を底本としている。増補本以前に原刊本があ

ったはずであるが、その刊行時期や「精忠録図」の有無は知ることができない。内閣文庫所蔵の嘉靖壬子（31）孟冬楊氏清江堂刊本⁵（大尾の蓮牌木記による。なお巻一巻頭第三行には「書林清白堂刊行」の文字が見える）『新刊大宋演義中興英烈伝』八巻（書名は巻一本文題による。その他の七巻の本文題はいずれも「新刊大宋中興通俗演義」とする。以後は『中興英烈伝』と略称する）の末尾に附される『会纂宋岳鄂武穆王精忠録後集』（以後は『後集』と略称する。巻頭第二、第三行に「賜進士巡按浙江監察御史海陽李春芳編輯」、「書林楊氏清白堂梓行」の二行の記載があり、末尾に「嘉靖壬子年秋清白堂新梓行」の木記がある）の大尾に置かれる李春芳の「正徳五年歳次庚午秋八月哉生明」をいう「重刊精忠録後集序」によるなら、正徳五年（1510）に刊行されたものの底本が弘治十四年の増補本『精忠録』であって、その際李春芳により再度増補され『後集』と改称されたと知れる。ちなみに増補本を『後集』とよぶゆえならびに『後集』以前に『前集』があったかについてであるが、『後集』は『精忠録』の巻四以降のみを再度増補してなったものと筆者はみている。「嘉靖三十一年歳在壬子冬十一月望日建邑書林熊大木鍾谷識」を題する「序武穆王演義」に以下のごとき一節があるからである。

『武穆王精忠録』原有小説、未及于全文。今得浙之刊本、著述王之事實甚得其悉。然而意寓文墨，綱由大紀，士大夫以下遽爾未明乎理者，或有之矣。近因眷連楊子素号涌泉者，挾是書謁于愚曰：「敢勞代吾演出辞話。庶使愚夫愚婦亦識其意思之一、二。」余自以才不及班馬之万一，顧奚能用宏發揮哉。既而懇致再三，義弗獲辞。于是不吝臆見，以王本伝行状之実迹，按通鑑綱目而取義，至于小説与本伝互有同異者兩存之，以備参考。

これに拠るなら、『中興英烈伝』はもと『武穆

王演義』といい、編者は建邑書林の熊大木鍾谷であって、熊大木は「原有小説（按ずるに、ここでいう「小説」はテキスト（本文）を指したのではなく、「説話四家」の「小説」を念頭に置いたものである可能性が高かろう）」の「浙之刊本」を「王本伝行状」と「通鑑綱目」により修改したものであるということになる。『精忠録』の巻一宋史本伝、巻二武穆事実はすなわち「王本伝行状」、「通鑑綱目」と認められるから、『中興英烈伝』が成立したことにより、『精忠録』の巻一、二は不要となったはずである。巻三の武穆著述も『中興英烈伝』の本文中で紹介することが可能であったから⁶、これも省略可能であった。以上によって案ずるなら、おのずと『後集』の前に『前集』はなかったという結論が導かれよう。『中興英烈伝』こそが『前集』であるといってもよいかもしいない。ちなみに、内閣文庫に蔵される『中興英烈伝』と同内容の『新刊大宋中興通俗演義』（以後はこれを『大宋中興通俗演義』と略称する）は、その巻一の巻頭第一、二行を「鰲峰熊大木編輯」、「書林双峰堂刊行（巻二、七は「書林万巻楼刊行）」とする。この『大宋中興通俗演義』の巻九、十は清江堂の刊になる『中興英烈伝』の末尾に附される『後集』と基本的に一致しているが、そこでは『精忠録』と称されていた。

三 『精忠録』、『中興英烈伝』と『大宋中興通俗演義』三者の図像の関係

ひるがえって清江堂嘉靖三十一年刊の『中興英烈伝』の巻頭には岳飛の肖像半葉を含む図像二十四葉が冠されていた。その戦功列図のうち、第十八「戦勝帰舟」を除く第一から第二十一のあわせて二十の戦功列図の画題が、李氏朝鮮刊本『精忠録』「精忠録図」の戦功列図の第一から第二十の画題と同一であった。これにより、石昌渝は「清江堂在刊刻『大宋中興通俗演義』（筆

者はこれを『中興英烈伝』とよんでいる）図像時所依拠的底本、与今存李朝銅活字本『精忠録』之「精忠録図」完全相同」、「『精忠録』之「精忠録図」是弘治十四年陳銓序本『精忠録』「精忠録図」的覆刻⁷」と断じた。筆者の意見はこれと多少異なる。筆者は、清江堂が『中興英烈伝』の図像を刊刻した際に依拠したのは、それ以前に刊行された『精忠録』の「精忠録図」であって、その『精忠録』は万曆十三年に李氏朝鮮王朝が依拠して刊行した『精忠録』と同一ないしは同一系統の刊本とみている。

熊大木は「序武穆王演義」のなかで「『武穆王精忠録』原有小説、未及于全文」といつている。『中興英烈伝』の戦功列図の第二十二図「岳飛擊走金兀朮于郟城、追至朱仙鎮大破之」、第二十三図「岳飛奉詔班師」は、『精忠録』「精忠録図」第三十三図「戦朱仙鎮」、第三十四図「偽詔班師」と画題こそ異なるが同一題材を扱っていた（図柄は全く異なる）。しからば『中興英烈伝』は新作の二図（上述の第十八図「戦勝帰舟」を加えるなら三図）で原『精忠録』「精忠録図」の十四図に替えたことになる。言い換えるなら、『中興英烈伝』の戦功列図の第二十四図以降は、『精忠録』の「精忠録図」に対応するものがない内容に応じたものということになる。事実この六つの戦功列図に相当する内容は『精忠録』にみあたらない。つまりこの六つの戦功列図に対応する内容が熊大木のいう「原有小説、未及于全文」にあたることになるのである。ちなみにこの六つの戦功列図の画題は、第二十四図が「岳飛行次河南、軍民痛訴遮道留之」、第二十五図が「詔張俊同岳飛如楚州闔軍」、第二十六図が「岳飛辭解兵權」、第二十七図が「岳飛父子帰田」、第二十八図が「詔取岳飛就職」であり、第二十九図が「岳飛登山金寺」⁸であった。

熊大木の清江堂刊本『中興英烈伝』は万曆年間『大宋中興通俗演義』の名で周氏万巻楼か

ら重刻された。万巻楼刊本はその後余氏三台館により覆刻された後、改めて上図下文本として刊行された⁹。この間、内容に変化はなかったが、図像は清江堂刊本『中興英烈伝』の巻頭に戦功列図を一括配置する形式から、万巻楼刊本『大宋中興通俗演義』の本文中に見開きの大図を嵌め込む形式に変わり、三台館刊本では再度上図下文本形式へと大きく変わったのである。

四 歴史演義小説に戦闘時事版画を附す最初の試み

中国の版画には「戦闘時事版画」の名称で概括することができる一群が存在している。筆者によれば、「戦闘時事版画」は「歴史的に意味のある戦闘及びその前後に発生した事件を内容とし、それから遠くない時点で製作された版画であって、その銅版、木版、石版とを問わない」と規定される。三山陵は「戦闘時事版画」の淵源を乾隆帝の銅版による「十全武功図」において¹⁰。筆者は上述した『精忠録』の「精忠録図」を、乾隆帝の銅版「十全武功図」に先立つ、「時事」の要素を欠く「戦闘版画」とみている。この考え方が大方の賛同を得られるのであれば、『中興英烈伝』こそは「戦闘版画」を附した歴史演義小説の口開けだったということができよう。口開けとはいったものの、『中興英烈伝』の後を襲い「戦闘版画」を附して歴史演義小説を刊行しようとする試みがあったか否かは明らかでない。嘉靖癸丑(32年)に楊氏清江堂から刊行された『新刊參采史鑑唐書志伝通俗演義』は無図本であった。いずれにせよ、万暦十年代末に王希堯、王少淮という二人の版画家が相次いで登場したことにより、中国の歴史演義小説の附図は「戦闘版画」から芸術性豊かな、しかし「戦闘版画」とは似ても似つかぬ徽派の版画にとって替わられることになった(ちなみに『大宋中興通俗演義』の附図にも「王少淮写」の署

名があった)。かくて清江堂から刊行された『中興英烈伝』は、中国小説史上唯一の「戦闘版画」を持つ歴史演義小説となってしまったのである。

ひるがえって『中興英烈伝』(と『精忠録』)が「戦闘時事版画」ならぬ「戦闘版画」を冠したのはなぜか。その原因としては以下の三つが挙げられよう。その一は誰にも明らかである。岳飛は宋の人であって明の人ではなかった。だから岳飛の活躍を図像にしてもそれは「戦闘版画」でしかありえなかったからである。その二としては、その一と関連するが、当時はまだ「時事小説」とよべる歴史演義小説¹¹が誕生していなかったことが挙げられよう。「時事小説」が存在しないなら、それに附す「時事版画」も存在しえまい。その三は、上図下文本を除き、これ以前の小説(平話や詞話を含む)の版本に図像は附されていないことが挙げられよう。しからば清江堂が小説に版画を附した試み自体、実のところ前代未聞の大事件だったのである。

ちなみに『精忠録』を刊行した万暦十三年と乾隆三十四年であるが、いずれも李氏朝鮮王朝にとって特別な年であった。李山海の「精忠録序」によれば、万暦十三年の刊本は、万暦甲申(12年)の冬に我が殿下、すなわち宣祖李昖が『精忠録』一帙を芸閣に下し、印刷して広く伝えしめたものであったという。しかるに、その前年万暦十一年には建州女真の酋長だったヌルハチの祖父と父がいずれも陣没しており、替わって指揮使に封ぜられたヌルハチがこの年の五月に兵を起し、尼堪外蘭を攻め、父と祖父の仇を討っていた。その後ヌルハチの建州における勢力がますます大きくなったのは言うまでもない。李氏朝鮮王朝としてもヌルハチによる朝鮮侵略を恐れていたに違いないのである。乾隆三十四年には清・第六代高宗乾隆皇帝の「十全武功図」の第一「平定准噶爾回部得勝図」の原画の製作が開始されていた。のみならず、十全武

功のおよそ半数もこの年までに勝利を収めていた。つまり、この年は清朝の対外姿勢が最も強硬となった年、言い換えれば、李氏朝鮮王朝にとって清朝の脅威が最も高まった年だったのである。李氏朝鮮王朝がこの両年に『精忠録』を刊行したねらいが臣下の愛国心を鼓舞することにあつたであろうことは明らかである。

最後に『精忠録』原刊本の刊行時期について考えてみたい。『精忠録』は歴史演義小説ではないしその刊行も弘治以前であつたから、書坊による営利出版によるものとは考えにくい。何らかの意図のもとに出版がなされたに相違ないのである。ではその意図とは何か。按ずるに李氏朝鮮王朝の場合とさまで異なるのではあるまいか。つまりは愛国心の鼓舞を主要な目的として出版がなされたと考えられるのである。とすれば、原刊本刊行時の明朝の政治情況も、万曆十三年ないし乾隆三十四年における李氏朝鮮王朝のそれと同様だったのであるまいか。しからば『精忠録』原刊本刊行の時期として、瓦刺の捕虜となった英宗に代わって八月に邸王朱祁钰が監国となり、九月に即位して代宗となつた、「土木の変」が発生した正統十四年即景泰元年(1449)、ないしそれからさして遠からぬ時期をあてることもできるのではあるまいか¹²。

注

- 1 「精忠録肅廟御製序」に以下のごとき記載がある。

予……近又得唐板『精忠録』、題詩卷首矣。……是録又有写本。即我宣祖大王十七年甲申冬命芸閣印出而広其伝者也。……惜乎大内独無此印本也。篇之首尾俱有奉教序跋、文復何多言。図写一通訖、祇以畧百世相感之意、識而題之。歳在己丑春正月辛巳序。当寧己丑孟夏崇政大夫行兵曹判書兼知春秋館事綾恩君臣具允明奉教書。

また「当寧御製後序」にも以下のごとき記載がある。

予于幼時得見一部『精忠録』、逐段有図。首書其文起于「祀周全廟」。蓋岳武穆学射于周全、而射亦六芸中一故也。……穆廟十七年甲申冬命梓、而首尾俱有

序跋文……此録士夫家有藏之者、故予于十五歳先見焉。其翌年己丑始為御覽、其間即一百二十六年也。其時命図写而首尾序跋亦令写字官繕写、作為四卷、首題御製序、藏于宝文閣。……嗚呼不肖十六歳仰瞻是事、于今七十六歳。因嶺伯李瀛狀聞、得知故宣伝官趙益道家有受賜之本、命取以來、即己丑旧印本之一也。嗚呼六十一年回甲之歳、再見此本、誠是万万料表。已命芸閣図写入梓。序跋亦令活印……歳皇朝崇禎戊辰紀元後三己丑孟夏丁丑拜手謹識。通政大夫承政院左副承旨兼經筵參贊官春秋館修撰官李瀛奉教謹書。

なお引用文中の「己丑旧印本」については「甲申旧印本」の誤りと思われるが、ここでは疑問を呈するに留めたい。

- 2 藤本幸夫は『東京大学総合図書館の漢籍とその旧蔵者たち—展示資料目録展—』（東京大学附属図書館、1995.10）の「会纂宋岳鄂武穆王精忠録」の解説で、東京大学総合図書館阿川文庫本について以下のごとき記述をしている。

30. 会纂宋岳鄂武穆王精忠録 6巻図1巻4冊

朝鮮英祖 45年銅活字（戊申字）印本……本書は朝鮮において、既に宣祖 18年（1585）銅活字（癸酉字）印本があり、宮城県立図書館蔵本（に）は……趙序、柳跋を失つたものと考えられる。これらの序跋によれば、鎮守浙江太監麦が従来行われていた『精忠録』に増補を加え、弘治 14年に陳銓に序を属して刊行した。宣祖 17年に北京に行った通訳官がその書を購入して持ち帰り、翌年王命で刊行された。本英祖本は、この宣祖本を底本としたものである。

なお英祖 45年とは乾隆己丑三十四年（1769）の、宣祖 17年とは万曆甲申十二年（1584）のことである。

- 3 石昌滄は「朝鮮古銅活字本『精忠録』与嘉靖本『大宋中興通俗演義』」（『東北アジア研究』2所収、1998.3）において、「尊経閣蔵本与宮城県図書館蔵残本属同一版本……可知此書刊印於万曆十三年、即公元一五八五年」としている。
- 4 川瀬一馬は『お茶の水図書館蔵新修成篋堂文庫善本書目』（石川文化事業財団 お茶の水図書館、1992年）の「（会纂宋岳鄂武穆王）精忠録 六巻三冊」の項目において、「当寧御製後序」中の「崇禎戊辰紀元後三己丑」に拠りながら、以下のごとく誤っている。

朝鮮清嘉慶十三年（わが文化五年、筆者按ずるに1808戊辰年）刊……万曆刊本に基き、序文中に見える崇禎戊辰紀元後三己丑孟夏とある嘉慶十三年に相当する年に印行したものである。

- 5 『中興英烈伝』の刊行書肆の問題（清江堂か清白堂か）については多くの説があるが、ここではそれらに言及することはせず、現存する嘉靖癸丑（32年）楊氏清江堂刊本『新刊參采史鑑唐書志伝通俗演義』の存在に鑑み、以下では清江堂刊本と呼んでおくことにする。
- 6 陳大康は『新刊大宋演義中興英烈伝』の編集創作方式につき、『明代小説史』（第三編第八章通俗小説創作的重新起步，上海文芸出版社，2000年10月）において、以下のごとく指摘している。
- 在描述岳飛業績的過程中，熊大木先後挿入這位民族英雄的二十一本奏章、三篇題記、一道檄文、一封書信与兩首詞，其中的大部分是作者的硬性鑲嵌，与小説創作其美已無關係。
- 熊大木在計画編撰時，就已決定要將『精忠録』載有的岳飛的所有文字全都挿入自己的作品，而不是根据小説創作的實際需要，經篩選後再作引入。
- 7 石昌渝の注2の論文を参照されたい。
- 8 『中興英烈伝』は「胡迪遊地府」、「親見秦檜受嚴懲」、「岳飛享天恩」をもって結びとしている。これもおそらくは「原有小説，未及于全文」の範囲の中であろう。ただしこれは宣徳年間になった趙弼『效顰集』の「統東窗事犯伝」を要約挿入したものと思しく、おそらくは熊大木自身の創作ではあるまい。
- 9 上原究一の「唐氏世徳堂と周日校万巻楼仁寿堂の章回小説刊本の覆刻及び後印の事例について」（『中国古典小説研究』第16号所収，2011年12月）を参照されたい。
- 10 三山陵『十九世紀中国の戦闘時事版画—太平天国から義和団事件まで—』（埼玉大学博士学位論文，2007年3月）を参照されたい。
- 11 注6の陳大康『明代小説史』第五編第十七章時事小説的崛起与明末其他小説創作を参照されたい。
- 12 本論文は、下記の筆者の三論文ならびに涂秀紅から恵投を受けた「《大宋中興通俗演義》与《精忠録》的關係」（掲載誌不詳）を踏まえたものであることをお断りしておく。

嘉靖定本から万曆新本へ—熊大木と英烈・忠義をきっかけに

『東洋文化研究所紀要』

第124册所収，1994年3月
关于李氏朝鮮出版的《（会纂宋岳鄂武穆）精忠録》

『中国文学研究』第11号所収 2008年6月

「戦闘時事版画」の誕生をめぐって

『日中芸術研究』第38号収録予定。

『会纂宋岳鄂武穆王精忠録』、『新刊大宋演義中興英烈伝』挿画対照表

会纂宋岳鄂武穆王精忠録				新刊大宋演義中興英烈伝		
No.	癸酉字本図題	戊申字本図題	図形式	No.	図題	図形式
	武穆像	同左	半葉			
首	武穆王図（仮題）	同左	半葉	首	武穆王図（仮題）	半葉
1	祀周同墓	同左	見開	1	祀周同墓	見開
2	戦汜水関	同左	見開	2	戦汜水関	見開
3	張所問計	同左	見開	3	張所問計	見開
4	戦太行山	同左	見開	4	戦太行山	見開
5	戦竹蘆渡	同左	見開	5	戦竹蘆渡	見開
6	戦南薰門	同左	見開	6	戦南薰門	見開
7	戦広徳	同左	見開	7	戦広徳	見開
8	両戦常州	同左	見開	8	両戦常州	見開
9	戦承州	同左	見開	9	戦承州	見開
10	次洪州	同左	見開	10	次洪州	見開
11	戦南康	同左	見開	11	戦南康	見開
12	次金牛	同左	見開	12	次金牛	見開
13	蓬嶺大戦	同左	見開	13	蓬嶺大戦	見開
14	次虔州	同左	見開	14	次虔州	見開
15	復鄧州	同左	見開	15	復鄧州	見開
16	復鄂州	同左	見開	16	復鄂州	半葉
17	渡江誓衆	同左	見開	17	渡江誓衆	半葉2*
				18	戦勝帰舟	半葉
18	襄陽塞戦	同左	見開	19	襄陽塞戦	見開
19	戦廬州	同左	見開	20	戦廬州	見開
20	湖襄招降	同左	見開	21	湖襄招降	半葉
21	復蔡州	同左	見開			
22	帰廬復請	同左	見開			
23	屯襄漢	同左	見開			
24	破楊么	同左	見開			
25	破劉復雄	同左	見開			
26	大拳伐金	同左	見開			
27	都府議事	同左	見開			
28	貸謀反間	同左	見開			
29	戦鄆城	同左	見開			
30	拐子馬	同左	見開			
31	遣雲援王貴	同左	見開			
32	戦衛州	同左	見開			
33	戦朱仙鎮	同左	見開	22	岳飛撃走金兀朮于鄆城追至朱仙鎮大破之	半葉
34	偽詔班師	同左	見開	23	岳飛奉詔班師	半葉
半葉武穆像1面、半葉肖像1面、見開き戦功列図34面				24	岳飛行次河南軍民痛訴遮道留之	半葉
				25	詔張俊同岳飛如楚州閱軍	半葉
				26	岳飛辞解兵權	半葉
				27	岳飛父子帰田	半葉
				28	詔取岳飛就職	半葉
				29	岳飛登山寺	半葉
*『新刊大宋演義中興英烈伝』の「渡江誓衆」の図は、見開きの左半分が提前されて「復鄧州」の左半分のかわりに置かれている。このため本来見開きだった図が裏表に分かれてしまっている。これは、戦功列図の順を変えることはできず、見出しのない「渡江誓衆」の左半分と半葉の「戦勝帰舟」をならべることもできなかったからであろう。				半葉肖像1面、見開き戦功列図18面（渡江誓衆を含む）、半葉（戦功列）図11面		